

女子教育に関する一つの考察（第五報）

——中世初期における武家の女子教育——

岡　　ヤ　ス　子

（家庭科教育研究室）

An Inquiry into the Women's Education (5th report)

—The Women's Education of Samurai Families in the Early Middle Ages—

Yasuko OKA

I 鎌倉時代の世相と武家の教育

1. 鎌倉幕府の成立

教育は過去の時代の理想を伝承しつつも、社会の実状に則し、社会の真の要請に基いて行なわれ、時代の人情に適應する訓戒がなされると信じる。

すでに平安・鎌倉・室町各時代の貴族の女子教育を考察したが、中世初期における武家の女子教育を考察するには、さらに当代社会の実情を把握する必要があると考える。

平安貴族は文学・芸能さらにその生活も、あくまで優美、華麗なことを念願し、その結果脆弱な世相を生み出していった。平清盛はこの世相のなかで、藤原氏に代り、仁安2年（1167年）太政大臣として政権を握るや3ヶ月後、妻の妹と後白河院との間の皇子を天皇の位につけ（高倉天皇）、ついで自分の女（徳子）をその中宮とし、外戚としての権威を掌握した。藤原氏とは異なり宋との貿易に力を尽すなど、政治的手腕をふるったとはいえ貴族政治に倣い、奢侈逸楽にふけり、「平氏に非らざるものは人に非ず」と、わが世の春を謳歌したが、これらのことは皇族、貴族および寺院はもちろん武家からも憎しみをかう結果となり、六波羅政権は僅か20余年で源氏の軍門に下った。すなわち、治承4年（1180年）源頼朝が伊豆で平氏打倒の兵を挙げるや、妻政子の父北条時政の援助および、東北の反

乱鎮定のため前後12年間（前九年の役、後三年の役）の源頼義、義家父子の戦功によって、源氏の権威は高まり、源氏を新しい英雄として主従関係を結んでいた東国の名主・領主をはじめ、全国の武士の多くはその旗のもとに結集して平氏討伐に参加した。頼朝は平氏滅亡の原因に鑑みて、優雅にして文弱の風潮のある都を離れ、当時関東屈指の形勝の地であり、祖先より由緒深い地である鎌倉に政庁を置き、六波羅政権が行なったとは全く異質の政治・文化をうちたてようと、独自の政権を創設した。幕府の組織、結構は必要に応じ、実状に則して設け、従来の形式偏重から離れ、実際の、実用的を眼目としたので、政治はもちろん、学問、文化もその影響をうけて実用的となり、種々の社会問題に応用される文化が出現した。

2. 鎌倉幕府の政治・教育の目標

頼朝は自己の教養の乏しさを自認し、京都の学者（三善康信、中原親能、大江広元など）並びに僧侶を鎌倉に招いて歓待し、武家文化を創造することとなったが、武士に特に学問を勧めたとは考えられない。第一には武術の練磨を勧め、側近の武士を選ぶにも「譜代の勇士、弓馬の達者なる者を優先」したことは吾妻鏡巻廿三にみえる。さらに頼朝は奢侈の風を退け、質実を重んじ、困苦欠乏に耐える強い精神の養成を奨励した。その結果は家屋、服装、遊戯などあらゆる面に

現われ、例えば、武士の遊戯は、犬追物・流鏑馬・笠懸・相撲・狩猟など勇壮な武技が行なわれたことも質実な武士精神の発露である。しかし、実朝は特に京風にあこがれ、公家の女を室とし、將軍家では京風の絵合わせ、双紙合わせなど優雅な会が催されるようになったが、武士の間にも公家のもつ伝統文化にあこがれ、風流を求める心がひそんでいたことは否定できない。北条泰時は武家社会独自の憲法ともいべき御成敗式目（貞永式目）を制定し（1232年）、頼朝と同じく質実剛健の気風を奨励するとともに、社会の指導的立場にたつ者としては、文化的教養をも合わせ修めることの必要を説いた。さらに、弘安7年（1284年）新式目を定め、

第三条に「御学問有るべきこと」

第四条「武道廃れず之様御意に懸けらるべきこと」

第八条「殿中人礼儀作法直らるべきこと」など、学問、礼儀の修得を説き、しかも武人の本領としては武芸練磨の必要を明示している。この他書道、蹴鞠、管絃、謡曲などの芸能も武士の嗜みであると、文武兼備を教育の理想とした。その結果武士にも和歌、文学、芸能を志す者が漸次あらわれた半面、尚武の風は鎌倉時代末期の近づくに従って弛んでいった。

正応2年（1289年）10月久明親王が將軍として鎌倉に下向される時のことを、「宮の中のかざり、御調度などは更にもいはず、帝積の宮殿もかくやと、七宝集めて磨きたるさま月もかがやく心地す。いとあらまほしき御有様なり」。また、「関の東を宮この外とて、をとしむべくもあらざりけり。都におはしますなま宮たちの、より所なくただよはしげなるには、こよなくまさりて、めでたくにぎはしく見えたり」と、（増鏡下、第十一さしぐし）述べていることから鎌倉の様相を伺い知ることができる。

徒然草第八十段に「人ごとにて我身にうとき事をのみぞ好める。法師は兵の道を立て、夷は弓をひく術を知らず。仏法知たる気色し、連歌し、管絃を嗜み合へり。法師のみにあらず、上達部、殿上人、かみさままでおしなべて、武を好む人多かり。」と、公家階層に尚武趣好をもつ者がみられ、武士は次第に京風文化に

なじみ、公武文化の交流がみられたとしているが、当代の武士について「武人乃至武人出身者には文字の知識を欠いたものも多かった」「僧侶の中にも経文を逆にもって読経を仮装する者」もあったなど桜井秀氏は述べている¹⁾。南北朝時代に成立した「庭訓往来」をみると、鎌倉時代に入り商業の発達はめざましく、鎌倉市内七つの町が商業地区に指定されて繁栄し、職人の仕事は栄え、手工芸品が多くつくられ、地方と都とを問わず庶民の生活は漸次安定して、庶民文化向上の端緒を開くにいたったことが考えられるが、御家人を中心とする一般武家の経済状態は、幕府が1270年「御家人の所領質入れおよび譲渡を禁止」し、1297年にはいわゆる「永仁の徳政令」を施行したことからも理解できる如く豊かであったとは云い難い。

ここに武士が広く、早急には桜井氏の説く通り学問を身につけ得なかった要因の一つがあると考ええる。

3. 教育機関

教育機関については、律令による唯一の官設教育機関であった大学寮は、治承元年（1177年）京都に大火災がおこり校舎を類焼したが、その時は既に平家の権力が絶頂に達し、藤原氏の勢力は地に落ちて、学校復旧はできず、事実上その姿を消してしまった。その他藤原氏をはじめとする平安時代権力を誇った菅原氏、橘氏、在原氏などの貴族が氏族のために経営した私学も、貴族の勢力減退とともに全くその影をひそめたが、頼朝および北条氏は学事関係・教育関係の機関を特設した形跡はみられず、鎌倉時代は学校空白の時代といえる。従って当代の教育は家庭と学者による私塾、および寺院で読み書きを中心とする教育が行なわれた。これら私塾の発達は、従来中国大陸よりの書を殆ど教科書として使用していたわが国が、独自の教科書を作成する機運をすすめ、鎌倉時代には「千字文」「往来物」などが教科書として用いられた。

4. 仏教新宗派と社会教育

平安時代、最澄、空海の唱えた天台、真言の二宗は元来現世的なものではなかったが、年を経るに伴って天台宗は密教方面が盛んとなり、加持祈祷の法のみが発達し、真言宗も時代の要求に応じて同様に加持祈祷

1) 日本風俗史講座鎌倉時代の風俗桜井秀著

を事とし、両宗とも最初標榜した鎮護国家の主義は忘れ去ってしまった上、貴族の援護も得て世俗の権力を増し、宗教としての権威を失墜するにいたった。

鎌倉初期(1212年)著作の方丈記をみるに、都の大火災、また、「飢渴によりて飢え死ぬるものたぐひ数も不知」、さらに、疫病の流行、「大地震おこりて山はくずれ、河を埋み、海は傾きて、陸地をひたせり」と述べている如き天災地変に加えて、平家没落という現実、その後元軍の来襲など打ち続く戦乱、加えるに末法到来の思想などにより、武士をはじめ一般庶民は、不安と焦慮を深め、現実無情、人の世の頼み難きを感じ、厭世思想を抱くようになった。このような世相の中で、墮落した旧仏教の改革と武士、民衆を対象とする平易な仏教の新たな出現がのぞまれ、その要望にこたえて現われたのが念仏宗(浄土宗、浄土真宗、時宗)、日蓮宗、禅宗の三宗派であった。新宗派の伝導は平民的で、且伝導に用いた文書の多くは仮名交りで平易に書かれていたため、庶民は競って念仏宗、日蓮宗に帰依し、武士は自力悟得と不立文字を建前とする禅宗を信仰する者が多かった。これら仏教伝導の情熱的活動は、武士の生命を内面的に鍛えあげ、人々に自らを生かし、安心立命の境地を見出させ、生活力を強大にするなど社会教育上の貢献は大きかったといえる。

また、寺院内の教育は、僧侶を志す少年のほか、武家の子弟にも読み、書きを教える初等教育機関としての機能を果たしたのである。

Ⅱ 武家と女子教育

1. 女子教育の場

家庭以外に教育の場をもった男子と異なり、平安時代と同様女子教育はもっぱら家庭で行なわれ、その家庭教育の目標は「女の生きる道」「婦道」の育成にあった。徒然草第百七段に「女の性はみなひがめり、貪

欲はなはだしく、物の理を知らず、ただ迷ひの方に心も早く移り、詞も巧みに、苦しからぬ事も問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、また浅ましき事まで問はず語りに云ひ出ず(略)すなほならずして拙きものは女なり」との女性観を述べてはいるが、幕府の武士に対する教育的要請は、武家の女性に対する要請に大きな影響を及ぼし、武士の道²⁾に対して婦道が涵養せられたと考えられる。

2. 婦道と説話集

武士の理想とする徳目の忠孝・剛毅・礼儀・名誉・質素・淡泊などが婦道に影響を及ぼしたことは、鎌倉時代の質実にして実際の文化の特徴を背景に編成された教訓的、説話的文学書である教訓抄³⁾、十訓抄⁴⁾、古今著聞集⁵⁾、沙石集⁶⁾などおよび、吾妻鏡、徒然草の内容からも考察することができる。説話集は武士、庶民など広い読者層をもち、教訓書としての効果をあげたと考えられ、今回は説話集を中心に考察した中世初期の武家の女子教育を報告する。

古代末期から中世へかけての日本文学史はひとつの説話文学時代を経過したといえる。今昔物語から宇治拾遺物語へ、さらに、江談抄、打開集その他つぎつぎと説話集が編成されており、中世に入っても説話集編成の動向は衰えなかった。中世説話集の中には沙石集など仏教的教訓を骨子としたものが多く、集録している説話は各階層の人々を対象としており、その内容は多数の人に容易に受け入れられ、理解され易かったことが読者層を拡大かつ更新した要因と考える。殊に十訓抄はわが国最初の修身書とも称されている。

3. 家庭生活と徳育

北条泰時は御成敗式目五十一条の中で、文教政策の柱を忠、孝、貞の三箇条とした。

(1) 忠

武家は家の子郎党を養い、生死の巷を通じて強い主従関係を結び、その主従関係は永続的性格を本質と

2) 武士道の語は鎌倉時代には殆ど用いられず、沙石集には「弓箭の道」、太平記巻十には「弓矢の道」とある。

三田村鷹魚氏によれば、乱世から治世に移った後、寛永前後から武士道の名が用いられたとしている。

3) 貞永元年(1232年) 伯 近真撰

4) 建長4年(1252年) 成立 著者不詳

5) 建長7年(1255年) 橘 成季著

6) 弘安6年(1283年) 無住著 仏道説話集

し、信義、義理を尊ぶことを第一とした。「いざ鎌倉」ということばは端的に武士の覚悟の程をあらわしている。北条重時家訓に「信義のためには身をも、家をも犠牲にする」ことを訓し、沙石集にも「情ナク、義ヲ忘ル人ハ、人ノ皮ヲ着タル畜生ナルベシ」。また、「人ハ貧ナリトモ、心ヲバタテ、恥ヲモ知り、忠ヲイタスベキモノ也」と述べている。妻は夫の主君に忠誠を尽すことは求められてはいなかったが、夫婦とあれば、間接的に夫の主君に対して忠誠や奉仕を励まざるを得なかったであろうことは想像に難くないが、事実女子の教育に当っては「義理」を重んずる精神を教えたと考えられる。

平治物語に、平治の乱に破れた義朝は家臣の鎌田兵衛政家らとともに尾張に逃れ、長田忠政に殺された。政家の妻女は忠政の女であった。主君や夫の死を知りや、「情なき親に添ふならば、又も憂き目や見んずらん。同じ道に具し給へ」と、「夫の刀を抜くや胸貫いて失せにけり」とある。

中世における人間関係は、一夫一妻と夫婦の同居を原則とする父系制家族集団を最も重視し、（一族・一門・一統など称した）ついて主従関係とする観念が強かったと考えられる。そのため当時の忠は、忠自体が純粋な目的というより、多くの武家は一族・一家を全うし、子孫の繁栄をはかることこそが究極のねらいであったと推測できる。平治物語に「一命を軽じて軍するも息子を世にあらしめんがためなり」。また、「主君に誠を尽し、名を立てるも子孫のためなり」とある。沙石集には「君ニ忠アリテ榮エタルコト」として多くの説話をあげている。源平盛衰記に、一の谷の合戦の時、平山武者所季重なる武士に向って成田五郎家正の申したことばの中に、「只一人敵ノ中ニ打入リタリトモ證人ナキ所ニテ死タラバ、何トモナキ徒事、犬死トハ左様ノ事也。御方ノ続キタラン時ニ前ニ懸、命ヲ捨テコロ我モ人モ高名ニテ子孫ニ勲功モアランズ。闇討ニ殺サレテハ且ハ鳴呼ノ事」とある。桜井秀氏によれば「当時の人々は、“武士はくさのなびき”と評した」という⁷⁾。すなわち、主君は永続的とする考えよりも、「時に変更する」と考えたことを示すと思わ

れる。忠に対する考え方は、親子関係には及ばず「忠に徹して、清貧に甘んずる」より、家のため、子孫のため領土を拡大し、富めることを第一に願ったのが真実と考えられる。これは、武士は貴族と異なり地主として農業経営という現実の基盤の上に足を踏みしめていたので、武士の実力を支えるものは土地との結合であり、さらに、土地の支配を強固にする人的組織の確立にあったことから考えて当然のことといえよう。

(2) 孝

上記の如き親に対する子女は親への無条件の奉仕、孝の実践が迫られた。親の権威、特に武家社会における家父長の権威は絶対的であり、強大であって、親の言に絶対背くことは許されない。妻および妻以外の家族は家長の従者として奉仕することを教えられた。これが中世の孝の特徴であり、当時の多くの教訓書の説くところの孝である。桜井秀氏は「平安時代においては、むしろ孝より忠が先であった」としているが、平重時遣訓には「他人のよきまねをせんよりは、悪しき親のまねをすべき也」とある。

沙石集、十訓抄、古今著聞集に「身体髪膚ヲ破ラズ、名ヲアゲ、徳ヲ施ス」を孝とし、また、「父母ノ与フル身ヲ全クセザルハ今生一生ノ身ヲ忘ル人ナリ」と述べている。古今著聞集には「孝ハ天ノ正道ナリ、父父タラズト雖モ、子ハ以テ子タラズンバアルベカラズ」と。かような親に対する孝、夫に対する妻の奉仕と服従はすべて「家を中心」「家のため」「苗字にかけて」を基本とする教育の現われと考える。

(3) 貞

武士は信条として意志を鍛え、思い切りのよいことを必要な処世法とし、恩愛の情にひかれることをこの上もなく恥辱としたため、妻女に対しては冷酷とみられる態度をとらざるを得なかった。また、武家時代には弱者は強者に従い、女性は男性に圧せられることは免れぬと考えられるところから幕府は法令によって、女性の身体、名誉、財産などを保護した。例えば、夫婦間の規定を設け、「夫婦別産制」（分割私占）によ

7) 日本風俗史講座 鎌倉時代の風俗 桜井 秀著

り妻の財産上の権利が認められ⁸⁾、領地の所有も許されていた。(式目第十一, 十八, 廿一, 廿三, 廿四条などに示す) ために、鎌倉初期には地方の地頭職の夫の死亡後、妻が女地頭となり、政治・経済上の実力をもった女性もあったことを高群逸枝氏は述べている⁹⁾。沙石集には「人ノ妻、去ラルル時ハ、家ノ中ノ物心ニ任セテ取ル習ヒニテ侍レバ、何物ヲモ取り給ヘ」とある。鎌倉時代は一夫一妻をたてまえとしたが、これは徹底しなかったらしく庶民は別として公家、武士ともに権門富豪の殆どは、一夫多妻でその上、式目では妻の貞操を強要している。その原因の一つとしては、鎌倉初期の女性の貞操問題は寛大で男女間の節制の弛緩が伺われる。源平盛衰記によれば、袈裟御前は遠藤盛遠と通じていたとしており、源義朝の愛妾常盤は義朝の死後、三人の子供を守るためとはいえ、清盛と交って女子をもうけ、清盛と別れるや、大藏卿藤原長成の妻となって男子を生んでいる。要するに「貞婦二夫にまみえず」の道徳が確立していたとはいえない。そこで式目二十四条では「妻は夫の死後も、夫に対して貞操を守ることを原則」として、「須ク他事ヲ抛チ、亡夫ノ後世ヲ弔フベキ」で「忽チニ貞心ヲ忘レ改嫁スル」ことはよくないとした。第十四条では寡婦が再婚する場合、夫が生前譲与した財産は亡夫の子に譲り、子なき時は他の処分¹⁰⁾をするなど規定している。但し、鎌倉初期の「男女を問わず諸子分割相続」の制度も中世中期(室町時代)には嫡男長子の単独相続が多くみられ、中世後期には遂に家長制、惣領制による単独相続がもっぱらとなって、女子の財産相続権は

消滅し、婿取婚から嫁入嫁への婚姻形態の推移とともに、古代以来「家は女のもの」とする意識は変化し、この点で女性の立場は低下したといえる。女性の地位の低下は離婚後の規定によっても知ることができる。離婚後の子供の処遇として「男児は夫、女兒は母に属する」とする慣例から新式目では「十歳以下ノ男女共ニ父ニ付スル」とした。また、「夫は妻の過失の有無にかかわらず離婚が認められるが、妻は夫を棄てて再婚できぬ」と規定した。かような世相の中でも、「武士らしい武士を育てあげる」ため、その母たり妻たる者としての教育は厳しく行なわれたと考える。

教訓抄に「縦ば男は在京在陣在郷して留守なりとも先祖の菩提の日を忘れず、夫の身の上を寝てもさめても神仏に祈り、男子を近づけず、無益の女も出入させず、髪貌も刷はざる者」を女性の濫としている。太平記には「武士の女房となる者は其の意を一つに持つこそ其家を司り、子孫の名をもあらわす事なり」とある。曾我物語によると「兄十郎祐成が馴染んだ海道一の遊女大磯の虎は和歌、風流に優れていたが、十郎討死の後三七忌を迎えて、19歳の若さで出家し祐成の後世を弔った」という。父は伏見大納言実基卿とはいえ、これら遊女の例からも鎌倉時代初期とは異なり、武家の女は「二夫にまみえず」の貞操観を次第に強くしていったものといえる。太平記には戦に破れ、城がおちると、まず妻が自害して夫を励ました物語を多く伝えている。例えば、巻十一に「淡河右京亮時治は平泉寺の衆徒が押寄せ、かなはぬと思ひて“御事は女性におはすれば云々”と、妻に逃げることをすすめし

8) 女子の財産権(抄)

女性が親から譲られた財産が夫の手に移ることを防ぐという意味をもっていた。一種の家産減少防止策とみることができる。妻が管理、処分できた財産は

- ① 父母が女の嫁する時分与した財産。
- ② 婚姻存続中、妻が自己の名義で他人より取得した財産。
- ③ 夫より譲られた財産

妻の遺産に対し、夫の処分権は極力拒否され、生家側に返還。但し、御家人側の女と公家または非御家人との結婚の場合の財産に関する規定は多くその場合概ね女性に財産を与えないと結論している。

- 9) 日本婚姻史に、「肥後人吉荘の北半分地区の地頭尼御前、同南分地区にも女地頭の名がみえる。熊谷、毛利、吉川その他の各文書中女地頭の名を欠くものは殆どない」と述べている。
- 10) 三浦周行著日本法制史の研究によれば、亡夫の冥福をすすむべき事業、神社・寺院に寄進するなど……と述べている。

が、妻のいはく“十年余りの袖の下に二人の子供を育て、千代もと祈りし甲斐もなく、御身は今秋の霜の下に伏し、幼き者共は朝露に先立ち消へはてん後の悲しさを堪へ忍びては、時の間も永うべき我身かや、とても思ひに堪へかねば、生きて有るべき命ならず、同じくば思ふ人と共に敢果なくなりて埋もれん、苔の下までも同穴の契りを忘れじ”とて二人の子と共に碧潭の底に投じて死を急げり」と記している。また、「北条の臣安芸守貞俊が南都において楠木勢に召しとられ、首の座に直りつつ詠んだ辞世の和歌に形見の太刀を添え、聖僧に托して鎌倉の女房のもとへ遣した。女房は是等遺品をみるや、“誰見よと形見を人の留めけん堪へてあるべふ命ならぬに”と絶唱し、その太刀をもって胸さして死にけり」とある。かような女性に対する貞の教育が中世中期にいたり、楠木正成夫人や菊地武時夫人、瓜生判官保の母など典型的武家女性を多く育てた要因となったと考える。

Ⅲ 女子教育の理想

1. 婚姻の形態と女子教育

婚姻の形態、内容は時代の推移により急劇な変化をみるものではないが、そこには厳とした歴史の流れがある。平安時代、公家が通婚、招婿婚をもっぱらとしていたとは異なり、武家社会では嫁入婚も行っていたが、主従関係が複雑と緊密の度をますに従い、さらに権力と領土の拡大を唯一の願望としたため、婚姻が政略の具に供せられることとなった。当代の政略結婚は公家同士、公家と武家、武家同士でも行なわれ、その例は多い。鎌倉初期においても源頼朝が北条時政の女政子を娶り、足利義兼は政子の妹を妻とした。頼朝の女大姫君と木曾義仲の息志水冠者義高の婚姻、義仲の女は頼朝の長子頼家の妻となった。畠山重忠の妻は北条時政の女、畠山重忠の妹は千葉常胤の妻であるなど、その婚姻の意図は政略的のものといえよう。

平安時代の婚姻方式と貴族の女子教育については、既に発表したが、婚姻の様式、その成立過程などが女子の社会的地位ひいては、その教育のあり方に深い関係をもっと考えるので、中世初期の婚姻について考察を試みた。

(1) 君命婚

主従関係が複雑となり、時勢の影響で北条期には君命婚がその数を増した。君命婚は多くの場合政略婚であり、強制婚であった。君命を受けた当の男女は共に否応は言えぬ、承諾の意を現わさぬ時は身の危険を覚悟しなければならなかった。吾妻鏡卷十三建久五年二月の条に、江間殿嫡男（童名金剛、年齢十三）が元服するに際し、幕府は三浦介義澄を召され、「江間殿嫡男を簪とし、孫女の中好婦を撰びて配せよ」と命じた。平安時代の元服の副臥の名残とはいえ誠に理不盡といわざるを得ない。

(2) 許嫁婚

君命婚とともに当代その数を増加した許嫁婚は、相手の親同士の間で決定し、当人の意志は斟酌されなかった。特に女子は父兄の意のままに結婚するよう運命づけられ、そのための悲劇は多かった。先に述べた頼朝の女大姫と義仲の息義高の例など是有名である。吾妻鏡卷八文治五年八月の条に、戦場で敵と組打ちの最中に助けられた恩義に報いるため、自分の女をその子に配する契約を戦場の屍の前で取り結んだと記している。親の礼心の取引の具にしている。息子を含めて女を物品視した思想が伺われる例といえよう。

(3) 嫁入婚

平安時代、貴族がすべて優美性を尚び、生活の遊戯化、形式化から工夫した婿取婚の儀式は誠に複雑で、拙速を喜び巧遅を嫌った武家社会では儀式的面倒さに耐えかねた。その上、父権制の確立などの要因により、公家社会でも平安末期から次第に変化しつつあった婿取婚は、鎌倉時代に入り武家では年とともにその数を減じ、嫁入婚が中心となった。しかし、徒然草第百九十段には「妻といふものこそをこの持つまじきものなれ。（略）よそながらときどき通ひ住まんこそ、年月経ても絶えぬなからひとならめ」と述べていることから、一夫多妻の中では通婚もなお行なわれ、これをよしとしているといえるが、嫁入婚形態への移行は、中世中期以後女子の財産権が次第に喪失したと相まって、武家女性は男性に依存してのみ生きることが可能となり、「三従」の要求が強まったのである。

平安貴族は女の結婚により自己の栄達、昇進を願ひ、そのため幼い時から学問、芸能を身につけさせることに大いに努力し、「家は女のもの」としたが、当

代武家の婚姻の成立過程や形態から考えれば、平安時代に比べ、女子に対し特に学問を身につけさせる必要をさほど認めなかったであらうことが考えられる。

2. 精神的教育

説話集は何れも「こころの教育」を第一にとりあげているが、これは前回発表した鎌倉・室町時代の公家の女子教訓書「乳母のふみ」「めのとさうし」「身のかたみ」と軌を一にしている。十訓抄に「抑妹背のなからひは惜老同穴のゆえあって、たゞうちある友にはなずらへ難ければ、妻をもとむるには上臈は品を選ぶべし。次ぎまにはみめしなを先とすべからず。心を選ぶべきなり」と述べている。ではどのような心を十訓抄などの説話集、教訓書では理想としたのであろうか。

(1) 心操振舞定まるべき事

「生けるものは命に過ぎたるものはなし。畜生と生れたれども命を惜しむ心は人にかはらじ。恩を重くすることは同じかるべし」と、親切な行為、やさしい心、慈悲の心の必要を説き、報恩の説話を多く記している。説話はわが国および中国の例話をとりあげている。報恩について「禽虫のたぐひ恩を知るいわんや心ある人倫においておや」として、蜂、蜘蛛、古鳶、亀¹¹⁾の報恩、また中国の説話から鯉、蛇の報恩など述べている。報恩感謝の教訓は忠孝の教訓にも通じるといえる。孝について、養老の滝物語をはじめ、孝心深い人々の行為をあげ、その結果、武士および一般庶民の妻も、天皇からも恩賞を受け、幸福に富み栄えたとしている。但し、十訓抄には「若き女は父母の命に従ふべし」としながらも、たゞ父母に従うのみが孝ではなく「静ふべきときに争ひ、従ふべきときに従ふ」を孝とし、父母の諫めに従わず愛する男性を求めて相会した中国の若い女の例をあげ、「すきの道なれば一筋に定めがたし」と、その男女の行為をむしろ賞している。この点全く儒教的となった近世教育に比べ時代の相異を覚えるのである。さらに心美しくあるためには、和歌、音楽(琵琶、琴など)を修めるのがよいとして、和歌に通じた一条天皇の皇后定子をあげて賞讃している。また、「香爐峰の雪いかならむ」との院の

仰せに対してとった清少納言の行動をのべて、いつ如何なることにも正しく機敏に対処できる周到な心構えの必要を強く述べている。

(2) 慥慢の心離るべき事

仏典に「意志の倨傲なるを慥といひ、自己の分を省みずして他を劣れりとするを慢といふ」とあるとして、「人の世にある習慥慢を先として、よく穏便なるは少なし」と、この心を戒めている。例話として小野小町の盛衰をとりあげ、若い時慥慢であったため、年若くして母、夫、兄、弟を失ない「単独無頼となりて頼むものとしてなく、いみじかりつるさかえ、日々におとろへ、はなやかなりしかたちも、年々にすたれつゝ、心をかけたるたぐひもうとくのみなりしかば、家はやぶれて月のみむなくすみ、庭はあれて蓬のみいたづらにしげし。(略)次第におちぶれ、つひに野山にぞきすらいける。我よりさがれるをあなづり、貧しきをいやしめることなく、おごれる心を離るべし」と教えている。因果応報の仏教的思想に基づく教戒といえる。徒然草第七十九段に「何事も入りたゝぬましたるぞよき、よき人は知たる事とて、さのみ知り顔にやは云ふ。片田舎よりさし出たる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。(略)よくわきまへたる道には、必(ず)口重く、問はぬ限は云はぬこそいみじけれ」と述べている。また、行基菩薩入寂の時、弟子どもに「口の虎は身を破り、舌の劔は命をたつ、口をして鼻のごとくにすれば、後あやまることなし」「人の善をも云ふべからず、いわんやその悪をや」「まことの誤りをしりたりとも、我がため苦しみのなからんに強ちに、難じそしりても何かせん」と述べたことをとりあげて教戒としている。自分に直接利害関係がない場合、何事にも「我関せず」の態度であることを可とする教訓に対しては深く考えさせられるところがある。つづいて、「物をうらやまず、喜をも歎きをも深ふせず、すべて直しきを宗とし」と教え、「塞翁が馬」の説話をあげている。

(3) 儉にして驕らざる事

儉約をすすめ、驕るもの久しからずと戒めて、松下

11) 山陰中納言に危い命を助けられた亀は、後日、中納言の2歳ばかりになる若君を継母が乳母と謀り、舟から海に投じ、誤ってとり落した如く装ったが、かつての亀がその甲に若君を乗せ、舟端においたので幼い命が助かった、というのである。

禪尼が息子相模守時頼を迎えるに、「自ら明り障子の破ればかりを切り廻し」と、巷間よく知られた例話などをあげている。禪尼については徒然草第百十四段に「尼も後はさはさと張りかへんと思へども今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり」「世を治むる道、儉約をもとゝす。女性なれども、聖人の心にかなえり」と記しているが、質実剛健の気風を育成する母親の感化力の重要性を教え、女性の自覚を促し、女性本来の使命の認識を求めたものと考ええる。

(4) 多言を誡むべき事

「人は慮なくいふまじき事を口とくひだし、人の短きをそしり、したることを難じ、かくすことを頭はし、恥がましきをたゞす。これらすべてあるまじきわざなり」と、とかく多辯な女性をたしなめている。

(5) 耐え忍ぶ心あるべき事

「何事につけてもかたがた物にたへ忍ぶべきなり」として、西行がまだ俗人であった時「三つ四つになる西行の子供の死にあひたる折の西行の態度」を「物に堪え忍ぶる類なり」と果すべき事を果し、心を取り乱さなかったことをとりあげて説話としているが、この説話は十訓抄のほか、沙石集、宇治大納言物語などにも記している。特に「女の物妬、忍びつゝしむべし」と教え、「天暦の女御¹²⁾は宣耀殿の女術¹³⁾をそねみ給ひて、けしからぬ御ふるまひありけるによりて、御せうとの君達までかしこまり給ひけるとかや」と、戒めている。また、業平中将の妻を例にあげ、業平が他の女の所へ夜毎通うのに妻は「いささかもつらげな気色もなく」夫の意のまゝに通わせた。その上夜道を心配し、夜ふけて、和歌をつくり琴に合わせて歌った。

“風ふけば沖つ白波立田山 夜半にやきみがひとりゆくらむ”。前栽の中にかくれ聞いた業平は他の女を愛する心を失ったと述べ、風流とともに女の耐え忍ぶ心の必要を教えている。北条重時家訓に「人は妻をば心をよくみて一人をさだむべし。かりそめにも其外に妻をさだめてかたらふ事なかれ」と、男性の節操をも求めている。十訓抄には「女なりとても男子と同じく能く其の夫を撰び、尚その心を見るべし」と女性の自主性を認め、「臣の君を撰ぶに等し」と述べていること

から、中世初期においては末だ女性の立場を保護する傾向が伺える。しかし、現実には一夫多妻や君命婚、政略結婚が盛んに行なわれ、女性の婚姻に対する自由な意志が認められたとは云い難く、耐え忍ぶことを強いられたといえよう。

以上説話集を中心に女子の精神的教育の目標の概略を述べたが、各説話集はこの他に夫婦の道を厳しく教えている。その内の「妻を去らざる道、去るべき道」についてみるに、「去るべき道七つあり」としている。（古今著聞集）其七つとは、「一つは夫の父母のためによこまなる女、二つには間男したる女、三つには心こはき女、四つには物ねたみする女、五つには盗する女、六つには子なき女、其末絶へん事を愁ふべきなり、七つには悪しき病ある女なり。たゞ子なきはさしたる咎にはあらず」としており、この内容は後の「女大学」などに再びみることができる。

3. 学芸について

北条時頼は「近年武芸が廃れて自他共に職にあらざる才芸を好み、事に触れて吾が家の礼を忘る、まことに嘆ずべきなり」と云ったとある（吾妻鏡建長六年五月の条）が、十訓抄には「すべて及ばぬ程の身なれども芸能につけて望をとげ、賞をかうぶるもの古今数を知らず多し、あやしの賤の女、あそび（遊女）、くぐつまでも郢曲にすぐれ、和歌をこのむ輩よき人にも、もてなされ、撰集をもけがす、其ためしあまた聞ゆ」「芸能を磨きて志す道に達すべし」とあり、徒然草第一毀にも「ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道」と学問芸能を身につけることが人としてのぞましく、その効用は身分低い女にも、大きいと説いている。さらに学習についての心構えとしては徒然草第百五十段に「いまだ堅固かたはなるより上手の中に交りて、毀り笑はるゝにも恥ず、つれなく過て嗜む人、天性その骨なけれども、道になづまず、妄にせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ、人に許されて、双びなき名を得る事なり」。また、同第百八十七段には「芸能の所作のみにあらず、大方のふるまひ、心づかひも、愚かにしてつゝしめるは得の本なり。巧みにしてほしきま

12) 九条師輔の女安子、村上天皇の女御。

13) 小一条左大臣師尹の女芳子、村上天皇の女御。

ゝなるは矢の本なり」と、謙虚な心構え、真摯な態度の必要を述べている。誠に当を得た教訓である。

(1) 和歌

古今著聞集巻第五、和歌第六に「和歌は素盞鳥の古風よりをこりて、久しく秋津洲の習俗たり。三十一文字の麗篇をもて数千万端の心緒をのぶ。古今序にいへるが如く、人の心をたねとして、よろづのことの葉とぞ成にける。これによりて神明仏陀もすてたまはず、明王賢臣も必賞したまふ。春の花の下、秋の月の前、これもて蔭遊のなかだちとし、これをして賞楽の友とす」と古来の和歌の風流を賞し、鎌倉時代の公家、武士、一般庶民にいたるまでの男女の和歌を記述していることから、武家の女性も和歌の学習はしたものと考えられる。その一例としては、同書に「丹波守玉淵がむすめ白女、歌を詠みて祿を賜る事」の条に「亭子院、鳥養院に御遊びの時歌よくうたひて、こえよきものゝありけるをとほるゝに“玉淵がむすめ白女”となん申けり」その白女が院の御前で詠める歌、“ふかみどり かひある春にあふときは 霞ならねど 立ちのぼりけり”院は大いに賞せられ、「御うちぎ一重をたまはせけり」。其外上達部、殿上人をものをのきぬぬぎて与えられたという。また、「或生侍の許にして草売り詠歌の事」の条に、生侍が草売りに対して、「只今はりなかりければ、其草かしをけ。かはりは後にとれ、といひけるを草うりうちぎゝて、“あさましやかりとはいかにあさごとに 草にかけたる 露のいのちを”と、草売る人も和歌で返答したという。まして社会の指導者と考えた武家であれば女性も秋津洲の習俗を学習したと考えてよいであらう。

十訓抄には「和歌は人の心をも動かし、妹背の仲をもやわらぐる媒」「貧しき者、世をわたるはしとすともみえたり。その徳旁々多かるべし」と述べ、和歌により功德があったと次の如き例話をあげている。

① 小武部内侍が重病の時、枕辺で心遣いしている母を見上げてよき歌を詠み、その歌、神の心を動かし病が愈えたこと。

② 赤染衛門が子供の命危うき患の時“かはらんといのる命は 惜しからで さてもわかれん ことぞかなしき”と詠み、我執なき母心に、神助ありて命助かりしこと。

③ 遊女もよき歌を詠み、新古今和歌集、続後撰和歌集に選ばれ、宇多帝の御時、くぐつが「よき歌つくりて帝より御うちぎ一重」を給わったこと。など。

しかし、現実には仮名文字の普及した時代とはいえ、北条時政の孫女は12歳で仮名以外は書けなかったといわれ、尼將軍政子も政治の参考とした貞観政要を菅原為長に仮名書に直させたと伝えられていること、また、当代の婚姻成立の実態、さらに、和歌・学問で後世まで名をなした武家の女性は殆ど見当らぬことなどから、中世初期における武家の女子に対する和歌をはじめとする学問は、同時代の公家女性に比べさほど深められたとは考えられない。

(2) 習字

古今著聞集巻七能書の条に「もろもろの芸能の中にて手跡まことに優れたり」とあり、徒然草第一段にも「手など拙からず、走り書き」できることがのぞましいとしている。なお同第百二十二段には「人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手書(く)事むねとする事はなくともこれを習ふべし。学問に便あらんためなり」と述べている。

実用性を重んじた当代、生活の必要から前時代に引つづいて、手習いは女子にも課せられた芸能と考えられる。

(3) 音楽

音楽は古今を問わず、情操教育上重要と考えて、その指導が行なわれてきた。公家の女性では琵琶の名手として勾当内侍、箏の名手としては阿仏尼母娘が有名である。徒然草第十六段にものの音として「常に聞きときは、琵琶・和琴等」とあるが、琴などの芸能は学問に比べ家庭での指導が容易であると考えられ、武家の女性も学習したと考えてよいであろう。十訓抄では妙なる音楽により、大蛇、海賊などの難をのがれた例話をあげ「たけきもののふの心をなぐさむる事、和歌には限らず、これら皆管絃の徳なり」と教えている。

(4) 花道

室町時代以前にもかなり盛大な花会の開かれたことは動かし難いことと、桜井博士は述べているが、花道の成立は南北朝以後と考えられている。

(5) 裁ち縫いの技

裁ち縫いの技の習得について、説話集には全くふれ

ていない。しかし室町時代の女子教訓書「めのとさうし」に「武家の妻は馬に鞍おくひまに、かみしも一具縫はぬはあらじと也」また、「男のいしょう見ぐるしきは上下によらず女のはぢなり」と述べていることから、鎌倉時代の女子も裁縫の技を、その母より精神修養も含めて習得したと考える。

Ⅳ 終 結

女子教育の理想は貴族から武家へ、武家から一般庶民へと伝承されて理想の原型となったと考えるが、教育内容の何れの点に重点をおいたかは時代の実情、要請に従って変化したことは当然である。

平安時代の貴族女性の教育は源氏物語によれば、「見るままにいと美しげに生ふしたつる」こと、さらに、有閑無為の生活の中で学芸を深め「物まめやかに静かなる心の趣」を求めることを理想とした。鎌倉貴族の女子教訓書「乳母のふみ」では、「おいらかにうつくしき心」の教育を先とし、しかも平安時代と同じく学芸の道をきわめることを奨めている。鎌倉時代の武家文化は实际的であり、実用性を尊んだ結果、女子教育にもこの面が反映し、母として、妻として必要な精神的教育を第一とし、学問・芸能の方面には重気がおかれたとは考えられないが、実用に応じ家庭で指導されたといえる。その精神的教育の目標としては、

(1) 夫を戦場に送り出せば、生命財産の保証のない当代、家を守り一族、一門の親和と結合について調整し、老幼者を抱え困難に打勝って生き抜く剛健な気性、鍛練された意志、奉仕と犠牲の精神、喜怒哀楽の

情を色にあらわさぬ精神の育成。

(2) 謙譲従順な美徳と堅固な貞操観、さらに、嫉妬せず忍ぶ心、周到な心構えの養成。

(3) 慈愛心に富み、かつ意志的人物の養成。

以上が考えられるが、これらのことを多くの説話集、教訓書は具体的、实际的に説話を通じて教えている。その説くところの内容は現今受け入れ難い点も認められ、説話には笑止なものも述べられているが、精神的教訓として心に留めるべき面も多々あると考える。

参考文献

- | | |
|---------------|------------------|
| 十訓抄詳解 | 萩野由之閔 石橋尚宝著 |
| 十訓抄新訳 | 岡田 稔著 |
| 徒然草新講 | 佐野保太郎著 |
| 徒然草新詳訳 | 永井 一孝著 |
| 方丈記解説法 | 武田 孝著 |
| 平治物語 | 永積安明、島田勇雄 校注 |
| 太平記 | 後藤丹治、釜田喜三郎 校注 |
| 全譯吾妻鏡 | 永原慶二監修 貴志正道訳注 |
| 沙石集 | 渡辺綱也校注 |
| 古今著聞集 | 永積安明 島田勇雄校注 |
| 庭訓往来 | 石川 謙校註 |
| 日本婚姻史 | 高群 逸校著 |
| 日本婚姻史 | 中山太郎著 |
| 源平盛衰記・増鏡 | 岩佐 正、時校誠記、木藤才蔵校注 |
| 日本文化史 鎌倉時代 | 辻 善之助著 |

Summary

It is believed that the ideal of women's education was handed down from nobles to warriors and from warriors to common people and became the basic form of the educational aim. But what aspect of the education among the spiritual, scholastic and artistic ones was emphasized was different according to education among the spiritual, scholastic and artistic ones was emphasized was different according to the social status, actual circumstances and the demand of the age.

Yoritomo Minamoto, who established Kamakura feudal government, abolished what were formal and showy in the politics and culture and emphasized what were simple, actual and practical. Therefore many of the literary works in Kamakura Era are instructive and narrative. These books and Buddhism newly risen were considered to have influenced the education of warrior families and common people.

The result of the inquiry into the womens education in the early middle ages putting a stress to the collections of stories, such as Jikkun-sho and Shoseki-shu is as follows:

In those days there was no security of life and property on the part of women after sending their husbands to battlefields. Therefore sturdy mind, well-trained will and the spirit that never show joy and anger in order to unite and protect the members of a family or clan were nurtured.

Modesty, obedience, a strong feminine virtue, the suppression of jealousy, prepared for anything to happen, affection and the will to endure hardships were carefully trained. Such virtues brought up in the home education were factors, I consider, to raise typical samurai women such as Masako Hojo, Jenni Matsushita and later as Mrs. Masashige Kusunoki and Mrs. Taketoki Kikuchi.

2. Japanese short verses, handwriting, music and sewing were also taught at home. They were taught chiefly for practical purposes and not for scholarship as they were given to the women of nobles.

3. In the early middle ages, women's social status was not low. Man and wife might have separate properties and some women were lords of manors. They secured the status of responsibility in the household management.